江戸東京博物館
NEWS
EDO-TOKYO MUSEUM NEWS
江戸東京博物館ニュース
Vol.110
2020.10〜12

もっと知りたい 常設展示室

CONTENTS

- 「明治時代の歴史的様式」　東京都江戸東京博物館 館長　藤森照信
- 天明〜寛政期の美人画にみる江戸の「いき」
- 神田明神祭礼にみる、江戸の人々の願い

明治時代の歴史的様式

東京都江戸東京博物館 館長
藤森 照信

江戸東京博物館の常設展示室では、実物資料とともに、厳密な調査に基づく模型を多く展示しています。東京ゾーン「文明開化東京」コーナーには、音とともに動きもある「銀座煉瓦街」「鹿鳴館」「ニコライ堂」の縮尺模型があり、人気です。館長の藤森照信は、江戸東京博物館の開館に際し、東京大学に在職中から常設展示室の展示計画に長年携わり、これらの模型製作の中心を担っていました。いま、あらためて常設展示室模型の魅力を館長がご紹介します。

戦後しばらくの間、明治の西洋館は古くさい建築として無視されていたが、〝明治百年〟の祝賀にあたり見直されはじめ、今は、アーチやドームで飾られた姿も赤煉瓦や石といった材料もオシャレな作りとして愛好する人も多い。しかし、西洋館を深く理解しようとすると一つの壁が立ちはだかる。

様式(スタイル)である。

この教会はゴシック様式、この銀行はネオ・クラシック様式、この駅はヴィクトリアン様式というように西洋館には決まった様式がある。

こうした様式は古代ギリシャ以後ヨーロッパの歴史の中で時代ごとに決まっているが、15世紀のルネッサンスを機に、過去の様式を再生(ルネッサンス)したり復活(リヴァイヴァル)したり準拠(ネオ)することが始まり、日本がヨーロッパ建築を受け容れた明治期は、そうした歴史的様式を使う最後の時期にあたり、過熟し爛熟し、まるで歴史のオモチャ箱を引っくり返したような状態にあった。

私の世代が建築の歴史を学び始めた50年ほど前、ヨーロッパ由来の乱れ切った様式は知らなくても日本の近代建築史は理解できるとされていた。しかし研究を進めてみると、歴史的様式の無視は間違いであることがわかる。たくさんの様式の中から一つを選んで設計する時、なぜそれを選ぶかの決断が建築家には必要で、その時、何の思想も好みもなく選ぶなんてことができるはずはない。どんな様式も、しかるべき理由があって選ばれていたのだ。

たとえば明治の早い時期の三つの西洋館を取り上げてみよう。

まず1877年(明治10)完成の〈銀座煉瓦街〉の様式から。

イギリスのネオ・クラシックと呼ばれる様式をとるが、この様式は当時のイギリスの植民地で広く

銀座煉瓦街中央新聞社前賑わいの図
尾形月耕／筆　明治末期　資料番号 97201542

使われており、設計したアイルランド人ウォートルスは、大英帝国の植民地様式を自分もちゃんと実現できることを誇示したかった。なぜそんな意図をもったかというと、彼の本業は鉱山技師であり、当時のヨーロッパ社会では鉱山技師より建築家の方が格上と見られており、せめて日本では格上の建築家として働きたかったのだろう。

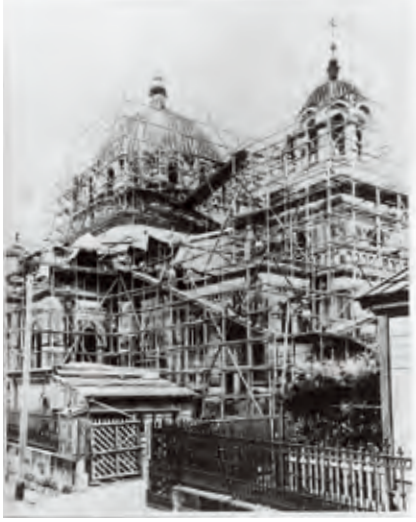
つぎに、〈鹿鳴館〉は屋根に見られるフランス系様式とヴェランダという植民地様式をベースとするが、ヴェランダの列柱には椰子の樹の姿を、室内ではイスラム装飾を加えるという奇妙な混合を特徴としていた。椰子の樹の列柱とイスラムの組合せは、当時のイギリスではインド風を意味していた。

鹿鳴館を設計したジョサイア・コンドルは〝地理的建築様式観〟をもち、西洋と日本の溝を埋めるには中間のインドの様式がふさわしい、と考えていたのだった。

モスクワから送られてきた〈ニコライ堂〉の原案は、ちゃんとしたロシア正教会の様式を持っていた。しかしニコライ堂の実施設計を引き受けたコンドルは、ロシア正教の平面はちゃんと守りながら、外観については、ロシア正教会を特徴づけるネギ坊主形のドームをやめ、イギリス風に変えてしまった。ネギ坊主には自分の美意識が耐えられなかったのだろう。

このようにすべての様式（スタイル）と姿には、手がけた建築家の想いと時代の傾向が込められている。

東京真画名所図解 鹿鳴館
井上安治／画　明治前期　資料番号 85200748



関東大震災写真帖　ニコライ堂
副見喬雄／撮影　1923年（大正12）　資料番号 89000122

ニコライ堂　復元年代：明治20年代

鹿鳴館　復元年代：1885年（明治18）11月

「江戸の美」
コーナーから

天明～寛政期の美人画にみる江戸の「いき」

都市江戸の町人社会で、「いき」の美意識が成立した18世紀後期の天明～寛政期（1781～1800年）、浮世絵の世界は、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽が活躍し、創造的なエネルギーに満ちていました。しかし当時の社会は、天明の大飢饉や物価の高騰が起こり、田沼意次の積極的な商業政策が終焉を迎えた時代でした。松平定信による寛政の改革が始まり、江戸の開放感と活気に影を落とし始めていました。その社会情勢の中、育くまれた「いき」を2作品の浮世絵から読み取っていきます。

当世遊里美人合　たち花
鳥居清長／画　1782-84年（天明2-4）頃
資料番号 89204074

遊里の「張り」

「当世遊里美人合 たち花」の女性たちは、橘町（現在の東日本橋辺り）の芸者で、座敷に出る前の身支度の様子が描かれています。中央の芸者は、まだ唇に紅を差す仲間のほうを見やっています。支度が整うと、芸者たちは呼ばれた座敷へ歩いて向かいました。彼女らの着物は当時流行の褄模様で、素足で下駄を履いて歩く、いきな裾さばきを引き立てました。鳥居清長の描く流麗ですらりとした体躯は、江戸美人の理想の姿で、現代では「江戸のヴィーナス」と評されています。出番を控えた芸者たちの「張り」が、生き生きと描かれています。

機微を知る恋

頬杖をつき遠くを見やりながら、ふと目を細める。「歌撰恋之部 物思恋」は、顔の表情や手の仕草で、心の内の動きを捉えた「美人大首絵」。喜多川歌麿による傑作です。無駄のないすっきりとした描線が、顔の表情に軽みと品を与えています。既婚を示す剃られた眉、庶民が結った「灯籠鬢」しの字髷」は、町屋の女房であることを表しています。

歌撰恋之部　物思恋
喜多川歌麿／画　1793年（寛政5）頃
資料番号 16200003

小紋染の小袖は、ほんのり赤みのさす薄鼠色で、黒地に黄の格子縞の下着、紫の絞りの襦袢をいきに合わせ、顔と腕の色香を引き立たせています。人生の機微を知る年上女性が、恋の想いに遊ぶ姿です。

通ないきかた

この2作品の美人からは、世情の機微を知り「いき」に生きる姿が映し出されています。18世紀後期の江戸では、この行動理念を「通」と言い表していました。

「派手にしてはでにあらず いきニしていきを見せず しやれを知ッて洒落を隠し」（天明元年『雲井草紙』）という感覚が、彼女らの姿から観ることができるのです。

常設展示室「江戸の美」のコーナーの「浮世絵の世界」では、毎月テーマを設け展示替えを行っています。10月20日（火）～11月23日（月・祝）は、鳥居清長の特集。今回ご紹介した「当世遊里美人合たち花」を展示します。

（学芸員　西村直子）

「江戸の四季と盛り場」コーナーから

神田明神祭礼にみる、江戸の人々の願い

常設展示室の江戸ゾーンでひときわ目を引くのが、高さ8・6mにおよぶ「神田明神山車」。江戸の三大祭の一つ、神田明神祭礼（神田祭）で曳き出された山車を、原寸大で復元したものです。

江戸時代、1681年以降、旧暦9月14、15日に隔年で催された祭礼では、神輿二基に神馬・提灯・長柄槍、そして氏地の町々による36本前後の山車や練り物が壮大な行列を成しました。行列は江戸城の北東（艮）で鬼門にあたる一帯を練り歩き、将軍の上覧のため江戸城に入城しました。そのため神田祭は、同じく将軍が上覧する山王祭とともに、「天下祭」とも称されます。数か所の城門を潜るため、山車は最上部の人形が下部に収納できる仕掛けです。

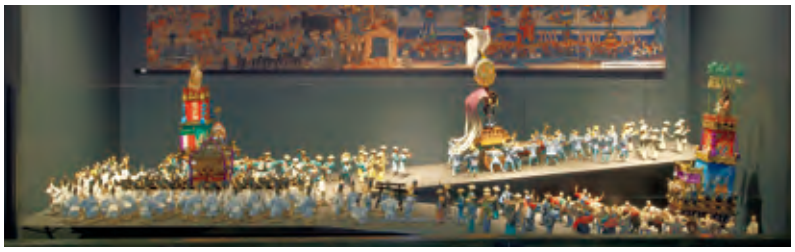
「江戸の四季と盛り場」コーナーでは、この山車とともに、賑やかな行列の様子の復元模型や、行列を描いた絵巻や錦絵を紹介しています。例えば、江戸時代後期の「神田明神祭礼図巻」には、浦島太郎や桃太郎、鯰に要石といった物語や伝説を表す、趣向を凝らした山車や練り物が描かれています。鯰と要石の山車は、地震除けの願いを意味します。同様に、鬼退治などの征伐譚を示す山車からも、人々の平安への願いがうかがえます。

また、祭礼のたびにつくられた「祭礼番附」（文字や絵で祭礼行列の内容を伝えた摺物。行列見物のパンフレットの役目を果たした。）を見ると、源為朝や鍾馗といった、疫病（疱瘡）除けの英雄たちの山車もつくられていたことがわかります。

そもそも神田神社の祭神である平将門は、その祟りが厄災や疫病をもたらすとおそれられたために神格化された人物です。神田神社は、疫病退散を願うのにうってつけの神社と言えます。

祭礼の開催時期は5月に変わりましたが、その熱狂は変わらず現代に引き継がれています。その裏にある厄災や疫病へのおそれと平安への願いも、今日のわたしたちには一層切実に感じられるのではないでしょうか。

（学芸員　春木晶子）



神田明神行列　復元年代：江戸後期

神田明神祭礼図巻　第二巻　横山窓／写　江戸時代後期 資料番号 96201316

神田明神山車　復元年代：江戸末期

日本衣文化の陰の立役者「型紙」
～江戸東京博物館の型染資料群について～

学芸員 川口友子・文

江戸時代の小袖類は当館の常設展示室で、一段と華やかな輝きを放っている。小袖は現在の和服の祖型となる衣服で、多彩な文様で彩られたものが多く製作され、その文様を表す染織技法も時代を経るにしたがって発展していった。特に、型紙と防染糊（ぼうせんのり）を用いる型染は江戸時代に隆盛した技法のひとつで、細密な文様を特徴とする小紋染や、浴衣に多用された長板中形（ながいたちゅうがた）もこれに含まれる。

長板中形型紙 桔梗によろけ縞
資料番号 05003180

卓越した型彫り師の技術から生み出された型紙は、その文様の美しさから海外の注目を集め、幕末期には大量に欧米に輸出され、ジャポニズムのデザインの源流となった。しかし日本ではほとんど着目されず、これまでの型染研究においても、型紙や型染技術の展開について言及されることはほとんどなかった。近年ではそうした状況が見直され、型紙の調査が行われているが、国内に点在する型紙コレクションの多くが地域・年代関係なく収集されており、型紙の使用時期が特定しづらいということがこの研究の妨げとなっている。

そうしたなかで、当館が所蔵する型紙資料群は、長板中形型付け師の清水吉五郎氏（１８７４～１９３６年）とその子息で重要無形文化財保持者に認定された清水幸太郎氏（１８９７～１９８８年）が使用した二千枚以上の型紙を中心とし、型紙の使用年代がある程度特定できる点で注目すべき資料である。この型紙からは、江戸時代から昭和期にかけての型紙様式の変遷を追うことが期待できるが、今日まで本格的な調査は行われてこなかった。そこで今年度より本資料の調査を進め、主に型紙の製作年代の検証を始めることとした。

長板中形型紙 柴垣に秋草
資料番号 05003087

幕末期以降、海外からもたらされた化学染料や新しい技術によって、日本の染織文化は大きな転換期を迎える。そうした変化の中で、型染は江戸時代以来の技術をどのように発展させていったのであろうか。今後の資料調査にご期待いただきたい。

図書室からお知らせ

図書室の仕事 Vol. 2

withコロナの図書提供

新型コロナウイルスの影響で私たちの働き方や生活様式は大きく変化しました。図書室でも安全にご利用いただくために様々な感染予防対策を講じています。机や椅子、パソコンなどは定期的に消毒をおこなっていますが、紙でできている上に大切な博物館資料である図書はそうもいきません。では、どうするか？

このコロナウイルスは、紙の上では24時間、プラスチックでは72時間で不活性化するといわれています。そのため、利用された図書はすぐに書棚に戻さず、所定のブックトラックで3日間別置をしています。別置中の図書を利用したい方には、表紙保護用のポリプロピレン製カバーを消毒用アルコールで拭いてからお渡しします。ウイルスを取り巻く状況は日々変化しておりますが、新しい情報を収集し、適宜対策を更新できるよう検討を続けてまいります。

蔵書整理・年末年始のため、以下の期間は図書室を休室いたします。
2020年12月14日(月)～2021年1月4日(月)

キュレーターズ・チョイス Vol. 8

江戸博コレクションから「浅草紙（あさくさがみ）」

浅草紙とは、江戸時代から1960年代頃まで使用されていた、現代のティッシュペーパーやトイレットペーパーにあたる「漉き返（すかえ）し紙（がみ）」です。漉き返し紙は反故紙（ほご）をほぐして再度漉きなおしたもので、当初浅草あたりで漉かれていたため、浅草紙と呼ばれています。また、その紙質が粗悪なので、「悪紙（わるがみ）」とも呼ばれていました。浅草紙のうまれた江戸時代は、紙の生産・消費量が多くなり、漉き返し紙が盛んにつくられていました。

資料をよく見てみると、古紙の墨が残っているので全体的に灰色です。髪の毛やほぐしきれていない紙、中には文字が残っている部分もあります。紙の大きさは18・3㎝×20・6㎝で、厚さを測ってみると、厚いところで0・42㎜、薄いところで0・16㎜。一般的なコピー用紙が0・09㎜でほぼ均一ですので、その厚さと漉きムラから、粗悪さがよくわかります。このような生活に密着したものは、捨てられてしまうことが多く、今に伝わるこの資料はとても貴重です。

（学芸員　白井麻美）

透過光撮影したもの。ほぐせていない紙の塊、漉簀（すます）のあとがよくわかります。

浅草紙
資料番号 95004694

ミュージアムトーク

常設展示室のみどころを学芸員が解説します。

- 日時：毎週金曜日16:00から
- 常設展示室5階の日本橋下までお集まりください。所要時間は約30分です。
- 変更または中止になる場合がありますので、最新の情報は当館HPでご確認ください。

企画展「大東京の華」	10月2日、11月13日	町の暮らし	11月6日、20日
江戸の美	10月9日、16日	高度経済成長期の東京	11月27日、12月4日
文明開化東京	10月23日、30日	江戸の四季と盛り場	12月11日、18日

江戸東京たてもの園

〒184-0005 小金井市桜町3-7-1（都立小金井公園内）
TEL 042-388-3300　https://www.tatemonoen.jp

江戸東京博物館分館
江戸東京たてもの園から

そよ風

前川國男邸・田園調布の家（大川邸）の耐震補強工事を実施しました

江戸東京たてもの園では、平成28年に発生した熊本地震を機に、復元建造物の耐震性を改めて見直しています。

平成29年度に、「前川國男邸」「田園調布の家（大川邸）」について、建物の耐震性を確認する調査である「耐震診断」を実施したところ、補強が必要という結論が出されました。その結果を受け、平成30年度に設計、平成31年度に耐震補強工事を行いました。

2棟共に目標とする耐震性能に対して壁の量が十分でなかったことから、工事では構造用合板とよばれる、強度の高い板を新たに設置し、壁の耐力を向上させました。構造用合板を設置した箇所は、建物の意匠に配慮して壁の内部とし、また解体の際に復旧が比較的容易な板張りの壁としました。その他、接合部の金物による補強や、基礎と土台の緊結、屋根の棟積みの補強等も行っています。

どの補強も目に見える箇所ではありませんが、併せて劣化部分の修繕も行っておりますので、工事を終えた復元建造物をどうぞお楽しみください。

（建築技術専門員　安藤亜由美）

耐震補強工事後の前川國男邸

レストランで楽しむ「文様」

江戸時代、日本と唯一交流のあったヨーロッパの国はオランダでした。当時のヨーロッパでは磁器を焼く技術がなかったことから、九州肥前地方の磁器は高い評価を受け、長崎交易の代表的な輸出品のひとつでした。

この「染付芙蓉手（ふようで）VOC字文皿」はオランダ東インド会社が発注、有田で製作し海外へ輸出されたものです。皿中央の大きな円には同社頭文字をデザインした「V.O.C」のマークがついています。大きな円の周囲を区切る文様が大きな芙蓉の花を連想させるデザインであることから「芙蓉手」と呼ばれ、当時のヨーロッパで人気のデザインでした。

当館1階レストラン「銀座洋食 三笠會館」では、人気メニュー「グリル野菜のカレー」を「染付芙蓉手VOC字文皿」を再現したお皿でご提供しています。お食事とともにぜひ文様もお楽しみください。

三笠會館　グリル野菜のカレー
（野菜は季節によって変わります。）

染付芙蓉手VOC字文皿
江戸中期　資料番号 95201624

今後の特別展

**「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵
古代エジプト展　天地創造の神話」開催！**

この秋開催予定!
会期は当館HPで!

「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵　古代エジプト展　天地創造の神話」
会場　江戸東京博物館　1階 特別展示室

※展覧会の詳細は当館HPでお知らせします。
※10月から開催予定であった「縄文」展は延期となりました。

パレメチュシグのミイラ・マスク
© Staatliche Museen zu Berlin, Ägyptisches Museum und Papyrussammlung Berlin / M. Büsing

江戸東京博物館 NEWS Vol.110

お問い合わせ　03-3626-9974（代表）
ホームページ　https://www.edo-tokyo-museum.or.jp
来館のご案内　JR総武線「両国駅」西口から徒歩3分
都営地下鉄大江戸線「両国駅（江戸東京博物館前）」A3・A4出口から徒歩1分
都バス錦27・両28・門33系統 墨田区内循環バス南部ルート「都営両国駅前（江戸東京博物館前）」下車、徒歩3分

発行日　2020年9月18日（金）
編集・発行　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
制作・印刷　株式会社D_CODE

表紙解説

ニコライ堂
復元年代：明治20年代

1884年（明治17）に建設工事が始まったニコライ堂。丸太を使って組まれた足場からは東京市中を一望することができた。模型背景の画像は、1889年（明治22）に、この足場から、360°の東京全景を撮影したものといわれている。ニコライ堂は1923年（大正12）の関東大震災で大きな被害を受けた。